

Computer Report

Vol. 56 No. 11 11月号 (通巻 746号)

はじめの言葉

■韓国の大統領が国家機密を外部に漏らしたとされる事件が発覚、大騒ぎとなっている。具体的にどのような内容の情報漏えいがされていたのかはともかく、情報漏えい対象者が宗教関係から知り合った知人だという。言ってみれば「ねえねえ聞いて」といった調子の延長線で、次の演説で何を喋るか、どんな服装をするかといった女同士の親しい付き合い関係だったのかもしれない。それにしても、お粗末極まりない話である。

■一方、大統領選で大詰めに入ったアメリカでも、クリントン候補が私的なメールアドレスを使って機密情報のやり取りをしていたのではないかという疑惑で、これまた大騒ぎになっている。刑事訴追されるかどうか FBI の調査が始まったという。国家機密に携わる立場にある人間として、私的メールアドレスの使用範囲が軽率だったでは済まされない。これまたお粗末極まりない話である。

■情報処理に活用されるシステム機器が多様化されている（あるいはコモデティ化が進んでいると言うべきか）なかで、活用レベルが広く深く浸透してきている。これはこれでいいとして、使用段階における基本的なセキュリティ感覚の欠如が思わぬリスクをもたらすことを改めて痛感させられる。他国の話ではなく、我が国の国家機密情報現場におけるセキュリティ管理レベルは大丈夫かと思う。

■不倫関係の果てに、その行状が週刊誌ネタとして発覚した後も、さらに個人的なやり取りをし続け、それが第三者らに筒抜けになっていたというお笑い草な話題があった。件のゴシップネタの背景にあったのが LINE といわれる SNS サービスだ。これを使い、個人的な秘密のやりとりを、ヒソヒソと当人たちはやり続けていた。文字通り、二人だけの秘め事として（のはずだった）。しかし、筒抜けだった。

■韓国大統領の情報漏えい事件の発覚が、廃棄された知人女性のパソコンに残っていた記録データによるものだったとされるが、情報の活用から最終的な廃棄までのプロセスにおける基本素養の欠落が致命的な危機を招いた。また、電子メールはじめ無料電話サービスなど SNS サービスは、インターネットテクノロジーをベースにされているという基本的知識の無さ（無知）が、決定的なセキュリティリスクを招く元となっている。

■そもそもインターネット技術とは、誰もがどこからでも覗くことができることを要諦とした通信技術である。それが日米冷戦時代、通信拠点を複数持つことで、メイン通信ポイントを破壊されても通信機能は保持し続けることができるものとして発案されたものだ。それが、誰でもどこからでも覗くことができる、すなわち受信／送信できるという意味である。この基本機能と同時に併せ持つ危険性に対する理解が必要である。

■利便性だけに注目した杜撰な情報処理は、想像を絶する事件／事態に発展する可能性がある。ましてや、一国の大統領、世界最大の経済大国そして軍事大国であるアメリカの大統領候補が関与したとされる事件、背筋を芯から震撼させるものがある。インターネットによって、いろいろな情報にアクセスできる。覗くことができる。これは同時に、利用者の行動自体が同時にアクセスされ、覗かれていることを理解したい。（藤見）